

相夫恋

松前 重義 作

祇園精舎の鐘の聲

諸行無常の響きあり

聞けや悲恋の物語

盛者の滅びる理を

ここ山里に男鹿鳴き

嵯峨のほとりの秋深く

月の光に誘われて

琴の音がすかに聞こえけり

峰の嵐か松風か 尋ぬる人の琴の音が

駒引き止めて立寄れば 爪音高き想夫恋

月は清し 嵯峨野の辺り

聴き得たり夢の音の 戸を隔てて伝つるを

無限の哀愁 無限の想い

悲歌一曲 人をして憐ましむ

まぎれも非ず聞きなれし 小督の局の爪音ぞ

歌の調べに酔うほどに 腰にさしたる横笛を

調べに合わせて吹き流し 局の想いを忍びけり

平家の一門栄ゆとも 恋は悲恋に終わることも

おこれる者は滅び果て 真の道は永久に

真の道は永久に

平清盛を恐れて嵯峨野の民家に身を隠した琴の名手小督の局が、宮廷を
思い高倉帝を偲んで独り月に奏でる想夫恋の秘曲、はてあの音は……